

# 移民のこどもと学校教育

澤田 裕之（筑波大学大学院／教育制度学）

## ウィンキーの白い馬

（原題：Winky's Horse）

- ◆ 種別 : DVD ビデオ（映画）
- ◆ 監督 : ミッシャ・カンブ
- ◆ 製作年 : 2005 年
- ◆ 製作国 : オランダ
- ◆ 発売元 : オンリー・ハーツ（品番 : OHD-0135）
- ◆ 販売元 : グラッソ
- ◆ 時間 : 本編 96 分
- ◆ 音声 : オランダ語／日本語
- ◆ 字幕 : 日本語
- ◆ 価格 : 3,990 円（税込）税抜 3,800 円



© BOSBROS. FILMS-TV PRODUCTIONS

### あらすじ

オランダでは、毎年 12 月 6 日は、「セント・ニコラスの日」と言われている。今日の「サンタクロース」の語源となった「セント・ニコラス（Saint Nicholas）」が白馬やお伴のズワルト・ピート（Zwarte Piet）と共にスペインから船で訪れる日で、街全体がニコラス一色になる。一年間、よい行いをしていた子はニコラスからプレゼントが貰え、わるい子は鞭で打たれて、ニコラスの袋に入れられて船で連れ去られると言い伝えられてきた。

主人公の少女ウィンキー（6 歳）は、中国からオランダにやってきた。学校に馴染めないウィンキーは、一頭の馬と出逢う。友人となった馬は病気により、息を引き取ってしまう。そして学校で「セント・ニコラスの日」を知ったウィンキーは、馬のプレゼントを熱心に祈る。本作品には、移民としてオランダにやってきた少女ウィンキーの葛藤と成長が描かれている。

### Chapter

1. オープニング／7'10
2. 初めての学校／6'40
3. 秘密の馬／6'06
4. 天国のサーチャ／10'28
5. お願い／6'08
6. パレード／8'09
7. 料理評論家／7'09
8. ニコラスとの約束／7'25
9. 馬小屋作り／7'12
10. プレゼント／8'09
11. 馬を返して／8'07
12. エンディング／6'32

### シーン再現

父親： その帽子は？

ウィンキー： ニコラスのためよ。

父親： だれ？

ウィンキー： セント・ニコラス。贈り物を配るヒゲのおじさん。

父親： サンタクロース？

ウィンキー：違う。セント・ニコラスよ。

父親：サンタクロースだ。

ウィンキー：(心の中で) パパは長い間、オランダにいるのに何も知らない…。

## 教育学の視点から



親もオランダの文化に関心を示さない。ウィンキーは学校と家庭で二つの言語を使い分け、二つの文化に身を置いている。

実際にオランダでは、複数の言語と文化の中で生きているこどもは多い。現在、オランダ総人口が約 1,657 万人であり、そのうち移民は約 336 万人(2012 年 11 月 1 日時点)と、全人口の約 2 割に及んでいる。オランダでは、「学校選択の自由」が保障されているため、移民の親は、移民のこどもが集う学校を選択することも可能であるが、近年は学校種を問わず多くの学校に移民のこどもが在籍している。

本作品では、ウィンキーが学校教育を通じて、オランダ文化に心を寄せる一方で、それを良く思わない親に対するもどかしさが随所に描かれている。移民第一世代のこどもにとって学校教育は、こども自身の生き方に対して大きな影響を与える、若しくは与えてしまうものとして捉えることができる。この点は本作品において、ウィンキーが、毎回、学校で習った新しい知識を親に伝えて行く場面、そしてそうしたウィンキーに対して、取り合わない親の様子から見て取れる。学校はこどもの教育に対して家庭と異なる役割を負っている。移民の子どもにとって学校は、自身の肌の色や言語の異なる人間が集う場所であり、その中で、成長していく場所である。つまり、移民第一世代の子どもは、自身が置かれた状況があるがままに受け入れ、生き方を見つけ出していかなければならないということである。従って、教員は学校を小さな社会として捉え、親に代わって、こどもが未来を描いていけるように、成長させていく役割を担っているということでもある。改めて、学校は、未来の自分を創る、ということを感じさせる作品である。

学校は、  
未来の自分を創る

### Information

本映画は、オランダ・アカデミー賞最優秀脚本賞、最優秀子供映画賞、シカゴ国際子供映画祭審査員賞などを受賞した。

#### 【参考文献】

- ・ 川瀬美加「風車の国で食と農⑥ オランダのクリスマスシーズン」全国共同出版『農業協同組合経営実務』、64 (2)、2009 年、pp. 68-71
- ・ 谷中央、長橋由理『ドイツ・クリスマスの旅』東京書籍、1995 年